

一 右衛門三淵

それでは具体的に『熊谷家伝記』を見ていこう。内容の叙述は私が訳したものである。巻ノ三は五代目の直光記である。この巻には天竜川、もしくは川にかかわる記事が散見する。なお竹内利美は「少なくともこの巻（第三巻―笹本注）以後の記載は『旧家伝記』の『書きつぎ記録』を主体に、直選が復元改修したものとしてみてもよいと思われる」（註一）と、この巻以降を事実に基づくとして、大変高く評価している。

享祿三年（一五三〇）十月五日、日向の舟本右衛門三（舟本氏は熊谷家の初代貞直の乳人の家と伝えられ、坂部郷開郷にも当たった船田孫右衛門〔土着後改姓〕の家で、熊谷家と最も関係が深い。近世末には名主役も勤めており、大杉家とならんで熊谷家に次ぐ家である）（註二）が鉄砲の試しをしようと熊谷家にやって来たので、直光は標的を見定めて打つようと言つて弾薬を渡した。

翌六日に日頃から恨みがあつたのか、右衛門三は同僚を理不尽にも六人打ち殺してしまった。そこで彼をからめ捕

らえて、一二日に大池が島へ引き出して淵へ沈めなければども、この右衛門三は無双の大強力の者だったので、縛つていた縄を引き切つて淵からかけあがり、見物していた者たちを投げたりして危険だった。やがて大角五郎八と右衛門三の兄の左門太の両人が組み止めたところを、直光が真二つに切つてこの淵に沈めた。その時に右衛門三がわめき叫んだ声は、半里よりも遠い日向の親の耳にも聞こえたという。

その後、大池が島の淵に右衛門三の魂が残つて、その淵に立ちはだかつたため、人々は恐れてその辺りに行くことができなかつた。それに加えその亡霊に出会つた者は、必ず四、五日ずつ病氣になつたので、光国和尚に願つて血脈（けちみゃく、在家の受戒者に授けられる法門相承の系譜）を申し受け、その淵に納めたところ、その後幽霊は出なくなつた。そこでこの淵を右衛門三淵と名付けた。

ちなみにこの右衛門三は大力のみならず、声の音が高いことは突き鐘のようだった。このために釣鐘右衛門三という異名をとつていた。常に彼の家の上で村の用事を連絡するのに、呼ぶ声がここまで手に取るように聞こえた。あるとき盗賊と思われるものが七、八人、萩の平に忍んでいたのを見つけたして村へ大声で連絡したが、右衛門三の大声

声に恐れて彼らは逃げ去り、この村に入らなかつた。

日向の前の橋を二〇人かかっても架けることができなかったのに、右衛門三が他所から帰ってきて、一人で難なく架けた。そこで彼の力は二〇人力を越えていたと思われる。右衛門三が架橋したことを知らないで村の者が翌日人数を出して現場に行つて見ると、彼が夕べのうちに橋を渡したということで、皆すすすごとただ帰つてきた。

ここで扱われているのは二〇人力という大力の持ち主の右衛門三、しかもこの人物は橋を独りで架けることができた人物だつた。橋はこの世とあの世をつなぐものと考えられ、本来人間の支配するような場所ではなく、中世ではこれを作るのにも勸進という方法が用いられ、僧侶がその主体をなしていた(註3)。つまり右衛門三はその意味で、橋をも個人の力で架けることができる二〇人力の人物として、特別な力を持った者として意識されているのである。そのような人物を取り押えた、大角五郎八と左門太を家臣として持ち、しかも右衛門三を即座に一刀のもとに直光が真二つにしたという、この記載は直光の武勇を示している。全体で最も重視されているのは光国和尚の法力である。こうした話の筋立てと、鉄砲が伝来したのが天文一二年(一

五四三)であることからして、この部分の記載は事実ではなからう。

この話が事実ではないとしても、注目すべきは普通の人ではない右衛門三を処刑するのに、繩をかけて淵に沈めようとし、これに失敗すると体を真二つに切つて、淵に沈めたことである。このことは右衛門三のような、あの世とこの世との接点にいるような者でも、川の淵ならこの世からあの世へと送り出すことが可能だと考えられていたことを示すものであろう。つまり、淵という場所は川の中でも特別な場所だつたわけである。

処刑に用いられる、従つて溺れ死にするだけの深さをもつた坂部の淵ということから、右衛門三淵は天竜川にあったと思われる。しかもその淵には右衛門三の魂が残り、亡霊となつて祟つた。淵は亡霊の出る場所として意識されている。明らかに『熊谷家伝記』を書いた直暹にとつて、天竜川の淵は特別な場所だつたのである。

ちなみに、坂部の瑞光院にはこの右衛門三淵にも関連した光国和尚の守り刀があつたという。伝説によれば次の如くである。

むかし坂部の瑞光院に光国和尚の守り刀といわれた霊剣があつた。狐つきの者が一たびこれを頂けば、狐はたちど

ころに退散し、夜泣きする子の枕元に一晚これを置けば、夜泣きが止むといわれていた。惜しいことにその刀は、寺の小僧に持ち逃げされて今はない。

昔、坂部の地頭熊谷直光という者が子細あって浪人の山伏を切り殺した。程なく家来の右衛門三郎という者が、大罪を犯した咎によって、これを右衛門淵に沈めた。その後その二人の死霊が祟って、色々の災いをなしたので、三河国善智識光国和尚に祈禱を頼んだところ、悪霊はことごとく退散してしまった。この地にしばらく足をとどめた光国和尚が、やがてこのところを去る時に、形見のしるしに直光に残したのが、この相州三原の正宗の短刀だといわれる（註4）。

先の『熊谷家伝記』の記載とともに、いかに光国和尚が法力をもった僧であったかを、この伝説も示している。

なお、ここで問題なのは川の淵に亡霊が出るということである。このようなことは伝説として、他にも天竜川水系に伝わっている。

「ア」 お玉の火

昔、生田村（現、下伊那郡松川町）にお玉というみなしこの娘があった。身よりといっては一人もないので、村の

庄屋に引き取られて、毎日いそいそと働いていた。お玉はかわいく、赤いたすきをかけて、裏の小川で洗い物などをしているのを、通り掛りの人達が振り返って見ていくほど良い娘だった。

ある日、庄屋の家に大勢の来客があつて、その後片づけをしている時、お玉はそそで大切な皿を一枚落として割った。その家の主婦というのが良くない人で、今微塵に割れた皿の前へ両手を付いて、ひたすら詫び入るお玉の額を手元の棒でたたかに打った。可哀相なお玉はどうとう追い出されて、痛ましい傷を押えてしおしおとその家を出ていった。誰に頼るといふあてもないお玉は、亡き母親の形見の品々を袂に包んで、泣く泣く歩いた。

天竜川を大島村（現、松川町）へ渡る宮ヶ瀬橋のあたりは、水が渦を巻いて大きな淵になっている。お玉は赤い鼻緒の下駄をとぼとぼと引きながら、何時か知らぬ間にこの淵の岸に立っていた。

頼るところもない辛い世の中に生きるより、死んだ父母のそばへ行つて、一つ蓮の上に乗る方が、今のお玉にとつてはどんなにしあわせに思われたであろう。お玉は観念の目を閉じて合掌した。

赤い鼻緒の下駄が波のうえをふわふわと流れていった。

そのことはすぐに村へ知れた。村の人たちはお玉を可哀相に思って、話はそれからそれへと伝わっていった。

しばらくすると怪しい噂が立った。小雨が糸のように音もたてずに降る闇の夜に、毬のような青い火の玉が、山手の方からふわふわと浮かんでくる、それが天竜の川筋まで出ると二つに割れて、その一つはやはりふらふらと川伝いに下の方へ漂っていく、他の一つは橋のあたりまで来てばかりと消える。村の人たちはそれをお玉火と呼んで、可哀相なお玉のことを今でも哀れんでいる(註5)。

「イ」赤子淵

下伊那郡清内路村の天竜川に注ぐ黒川に赤子淵がある。昔、夜盗の群れが領主の屋形を襲った。それも、タイマツを沢山燃やし、鐘や太鼓を鳴らしたから、屋形の方では多くの軍勢と思ひ違いをして、家来がみな逃げ去った。

一人の下僕が領主の子を背負って、この淵まで逃げてきたが、逃れ難いと観念して、子供を淵へ投げ込んだ。それから、岸に立って耳を澄ますと、水底から赤子の泣声が聞こえてくるといい、岸に残る手形はその赤子のものだといい(註6)。

川は国境(註7)になることがあることも明らかかなよ

うに、人間の社会を隔てることが多い。また川を流れる水は、人間を清めたりするのに用いられる。盆の供物や疫病送りなどを川に流すことも広く見られる。つまり、川そのものが我々の世界(この世)と神々などの世界(あの世・異界)とを結び付ける特殊な要素をもつのである。そうした川の中でも、以上見てきたように淵は、死者の靈魂が留まりやすい場所、この世の人間をあの世に送りつけるのうってつけの場所だと、特別に意識されていたのである。

註

- 1 竹内利美「序―『熊谷家伝記』五ノ巻解題―」(『熊谷家伝記五ノ巻』・富山村教育委員会・一九八四)
- 2 竹内利美「『熊谷家伝記』の村々」一五二頁(お茶の水書房・一九七八)
- 3 網野善彦「境界領域と国家」(『日本の社会史 第二巻 境界領域と交通』岩波書店・一九八七)、拙著『戦国時代の天竜川』一五頁(建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所・一九九一)
- 4 岩崎清美『伊那の伝説』二七二頁(歴史図書社・一九七九) 同右四二頁
- 5 一志茂樹・向山雅重監修、浅川欽一編『信州の伝説』一四二頁(第一法規出版株式会社・一九七〇)
- 7 拙稿「堺川の位置をめぐる」(『諏訪市史研究紀要』一号・一九九〇)